

富士山だけが山じゃない



日本人の価値観

河合 私、実はUCLAに留学してんです。

黒川 そうですか、大先輩ですね。

河合 一九五九年にフルブライトで行きまして、一年半おったんですよ。

黒川 私はペンシルバニア大学に二年いてから行きましたから、一九七一年でした。

河合 アメリカに長いことおられたので、日本へ帰ってこれると、いろんな点が違うと思うんですが。

黒川 アメリカでは、医師として取る資格は取りましたし、その間に研究もして業績も出さないと翌年クビになるというので、相当しんどかったです。

しかし、頑張れば認めてくれるので、そういう意味では非常に恩義を感じてま

す。帰ってきてみたら、日本の若い人はほんとに優秀なんだけど、教育がだめにしているなど痛切に感じました(笑)。

河合 賛成ですね。私は教育する側でしたので、反省しながら言ってますけど。その差というのは何だと思われませんか。

黒川 先生も学生も、教育の場では上下



くろかわ きよし。昭和11年東京生まれ。昭和44～58年在米。カリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部内科準教授から昭和54年教授。東京大学医学部附属病院分院助教授を経て、平成元年医学部第一内科教授。8年東海大学医学部教授兼学部長、14年同大総合医学研究所長。国際腎臓学会理事長、国際内科学会会長を務めるなど国際的にも活躍。15年より現職。

の関係じゃなくパートナーなわけです。学生は将来の社会を担う後継者だから、こういう人に育ってほしいかというのがあって、こちらがどんな育つ機会をつくるのが大事です。

日本にいと富士山が一番高く、一番姿が美しいとみんな思ってますけれども、若いときに外に行くと、キリマンジャロもアンナプルナもエベレストもあるし、日本に帰ってみると合川岳のような一八〇〇mだけど険しい山もある。何も富士山だけがいいのではないということを見せる、気づかせるのが大事だと思います。

河合 体質が変わるといのはなかなか大変なことなんですよね。

黒川 私、よく話をするんだけど、日本が四〇〇年前の大航海の時代に鎖国したというのは、国を統治する側としては非常にやりやすかったと思うんです。

河合 ある意味でいうとすごい偉大なことを、途方もないばかげた、偉大なことをやっているわけです(笑)。

黒川 日本は問題があるとよく「島国だ

から」というけれども、イギリスは島国なのに一九世紀に世界の半分を取っていたのはどういうわけだったか。島国じゃなくて島国根性で、その根性をつくったのはやっぱり鎖国ですね。すべてに内向きになっちゃいました。

河合 ある意味理想のシステムをつくったわけで、それが染みついてるから、なかなか変わらない。平和を維持するためには、自分をあまり伸ばさないことが前提になってくるんですね。

黒川 分をわきまえるというかね。江戸時代は生まれたときの身分で決まっていたわけです。だけど明治維新後は、結局どこの大学に入るかで身分が決まるような社会になった。

河合 身分を獲得したら、後は悠々と生きていく。だから、これを変えないかんわけです。

黒川 日本人の価値観とか文化の基本がそこにあると思うんですね。日本では、「人間」というのは「世間の人」という意味なんで、世間でのポジションで、常に自分の価値が決まってくる。



それから、文化とか哲学とか近代の歴史というのは、入試のため以外にはほとんど勉強していない。むしろ大学に入ってからこそ、それをやるべきだね。

河合 大学に入ってから教育を大学が考えれば、だいぶ変わると思いますけどね。

フィードバックのための評価

河合 学術と文化という問題では、いかがですか。

黒川 日本の場合は、明治維新のときからは「富国強兵」がモットーだったわけですね。戦後になったら「経済成長」がキーワードだったんです。だから、学術とか科学というものの価値を社会が評価している歴史が全然ないんです。明治時代に来日したベルツ先生が、「西洋からたくさんの方が科学の精神を教えようと思って来ているんだけど、日本人はみんな科学という木を育てるのではなくて、そこからなる実ばかり欲しがっていることを言っているけど、今とまったく同じですね。

「科学」と「技術」はまったく違うものだと僕は言っているんですけども。

河合 そうそう。「科学技術」とくっつけてしまうと、「技術」のほうが強くなってくるんですよ。そういう意味の科学というものは、文系の人ももっと知るべきだと思いませんか。

学術と芸術の評価ということも、難しい問題じゃないですか。

黒川 大学の評価と言われていますけれども、先生の授業を評価するのは当たり前で、それは先生をランキングするのでなくて、先生へのフィードバックとして非常に大切なことです。

そのために評価しているのであって、国立大学法人化ですが、パブリックマネーだから評価が必要と言っているけれども、これは本質がずれていると思うんです。先生は評価のための書類づくりで、自分の二五％の時間をとられている。それから特に国立大学の先生は、さらに二五％がよそに行って評価するための書類、報告書づくりですから、先生はみんな事務担当になってしまいます。

むしろアウトプット、つまりどんな学生が出てくるかという視点を混ぜることによって、大学の評価は自然に社会がしていきます。

河合 日本人は評価という場合に、フィードバックと考えなくて、順番がつくと思うんです。それを恐れるわけですよ。これは個人に対する評価でも全部そうです。だから、日本人の順番意識というものをつぶさない。

黒川 そのためには、教育のプロセスで広く外を見せて、富士山だけじゃないということをわからせることが教員にも学生にも大事だと思います。

河合 みんな日本にいてだけでやっているわけでしょう。だから考えが狭い。

ソフトパワーについても、日本人はやり出したら相当やるんじゃないかという期待はあるんですよ。ただ、今の日本の在り方というものが、それをなかなか許さない格好になっていますから。

黒川 昔は岡倉天心とか新渡戸稲造とか内村鑑三とか、欧米へ行つて教育を受けて、日本を知ってもらいたいと思つて英

語で本を書いているじゃないですか。今、六年間英語教育を受けて、大学進学率が五〇％で、誰が日本のことを英語で書くだろうかと思うんです。

河合 考えてみたら、日本ほど簡単に本ができて売れる世界は少ないと思います。英語で本を一冊書くのはなかなかたいへんです。そうすると、苦労して英語で本を書くよりも、日本で書いて売っているほうが便利でしょう。本当は、我々は外国の言葉で発表していくことをもつとやらないといけませんね。

黒川 そうですね。みんながやる必要はないんだけど、日本を知ってもらいたいという志の高さが足りないのはすごく寂しいと思うんです。

河合 私も年をとると、だんだん英語をしゃべるのが億劫になるんですが、あちらでしゃべるほうが質問がおもしろい。日

本人は、心の中ではばかにしていても、「いい話でした」とか言うでしょう。ところが、あちらの人はどんどん質問するし、その質問が非常におもしろい。それが僕は大好きなんです。

黒川 学会でも、向こうは真剣勝負の場だから、しゃべる人も質問する人も、みんなが見ていますからね。あれですべての評価をされてしまうわけです。

河合 こっちも負けん気が強いから、こんなくしょうと思つて言うのと、案外いいことを言ったりしてね(笑)。

黒川 いや、そうですね。そういうことを若い人に経験させたいなと思つているんですけどね。それが非常に大事です。

文化芸術の楽しさを教えて

黒川 ここ五年間続けて、自殺者が年間三万二〇〇〇人から三万三〇〇〇人ですけれども、突然、五年前に三〇％近く増えているんですよ。それがみんな四〇代から六〇代の男性で、そこに問題があるわけです。

日本では人間は世間の人だから、男に

とつて自分の肩書がなくなるということは、一番苦痛なんですよ。

河合 そこを根本的に変えていかなければいけない。難しい問題ですね。

黒川 大学を出たら大学院はよそに行くということをするべきなんです。それから、学生の間に一年くらい外国に行かせたい。うちは学部生を交換留学させていますけど、eメールで交信していますが、一か月でものすごく見方が変わってきます。「ぐんぐん自分が伸びるのを実感する」とみんな異口同音に言います。

日本の人はすごく優秀だし可能性もあるので、何も富士山だけじゃないということを早くわかるといいんですけどね。

河合 それと、日本人の場合は、仕事以外の芸術とか文化に接することをもうちょっと考えてほしいと思うんです。

黒川 おっしゃるとおりです。オペラでも中学生や高校生が安く観られるような席があれば。美術館にも小学校のときから先生がもつと連れて行くべきですよ。

河合 絵画とか音楽とかを日本の学校で教えるときに、おもしろさよりも苦しみ

黒川
うち

カ育ちで、小さいときにピアノをやつて
たんです。夏休みに帰国したときに日本
の先生に教わつて戻つたら、向こうの先
生に「あなたはすっかり変わつちやつた」
とすぐに言われましたね。日本だと、き
ちつとやるというのが教育だと思つてい
るけど、そうじゃない。

河合 きちつとやっても楽しかったらい
 いんですけど、苦しいほうを一生懸命に
 教えるでしょう。文化とか芸術について
 小・中・高の間に苦しみを教え過ぎてい
 るのも、一つの問題だと思います。

例えば、博物館とか美術館へ小学生、中学生が行きます。アメリカでも小学生が大勢行っていますよね。楽しそうでしょう。でも日本では、博物館とか美術館へ行つてうれしそうな顔をしている子はほとんどいませんよ。

黒川 先生自身が、楽しくてワクワクしてなかったらだめですよ。子どもって本能的に利口だから、やっぱり先生がワクワク

ワクしてなかったら、子どもがワクワクするはずがないじゃないですか。

若い人はぜひ世界へ

河合 日本学術会議も、先生のような人を会長にするだけでも変わりましたな（笑）。

黒川 それは私自身がびっくりしています（笑）。学術会議の雑誌でも、いろいろなことを書きまくっていましたからね。ほんとにそういう意味じゃ変わってきてるのかなと思います。

学術会議の会員や元会員には年齢の高い方が多いから、時間に余裕のある人も結構いるんです。だから、それぞれの地で小学校や中学校の先生たちと話をし、学生の活動や学校教育、社会教育に広く参加しようという話もしています。

河合 そのときに、学校の先生方を集めて一回講演して帰ってくるのでは意味がないと思います。そうじゃなくて、実際に教室へ行って自分も教えたり、学校の先生とその人が一緒になってどんどん話し合いをすると思います。

黒川　そうです。聞いていると、そうい

うことをご自分でやっている先生は何人もいるんです。だけど、研究者の社会的責任としてコミュニケーションに出ていこうというふうにして、小学校とか中学校にもつかかわっていきたいんです。

河合 私が以前、国際日本文化研究センターの所長をしたときに、隣の小学校の校長先生から授業をやってほしいと頼まれて、みんなで順番に教えに行っただです。ものすごくよかったですよ。日文研では小学生に教えられんような者は教授になれないという噂もできて、みんなものすごい苦労するわけです(笑)。

黒川 子どもたちにも、小学校の先生にもプラスになるでしょう。

河合 小学生を教えてみて思うんですけど、僕らの子どもたちのころよりはるかにすばらしいですよ。ものすごい表現力をもっています。これだけ小学生がすばらしいのに、大学に行くと悪くなるのは、大学教育の責任じゃないかと（笑）。

黒川 そう、大学の先生が悪い。でもその人たちも、子どもたちを前にすると頑

張つてやりますよ。だから、大学の先生や研究者の方は、やつぱり若者と教育の場と一緒に参加すべきだと思います。

世界中のいろいろな山を見ることによつて、やりたいことを自分で求めて、考へて、自分で決めて、自分で実行すると

学生さんも、アメリカやヨーロッパもいいけど、もっと意欲的にアジアに行ってもらいたいと思っています。

河合 若手の人がどんどんこれから海外に出ていくと思うんですが、何かメッセーじがありましたら。

なことだと思ひます。

河合 そのときに、失敗を恐れずにやる

になつてきて、これはありがたいことだ
と思います。

黒川 若いときはいくらでも失敗できるので、若い人たちに広い世界に出ていってもらいたいです。半年でも一年でもいいから、そういう機会をつくってやりたいと思います。

黒川 学生のときなんていくらでも失敗できるんだから、よそへ行つたほうがいいですよ。特に、二二世紀は、もつとアジアに目を向けるべきだと思ふんですね。

黒川 そういふ交流の輪が、将来の日本の信頼とか、個人的な信頼関係をつくるのにすごく大事だと思います。

河合 大賛成です。本日はどうもありがとうございました。(了)

憧れのプリマドンナ

誰というだろう。

文化庁長官になったおかげで思いがけない恩恵を受けている。遠い観客席から憧れの目で舞台上に眺めていただけたのは、すばらしい芸術家や芸能人に直接お会いしたり、ときには対談まですることができるとは。私はなにしろ「人間」に関心が深いので、ほんの少し言葉を交わせるだけでもうれいのである。そして、一芸に秀でた人はさすがだなと感心している。

文化庁の抜穴
河合隼雄

実は終戦後、私が二〇歳のころ、藤原歌劇団に彗星のごとく登場したブリマドンナが大谷洌子さんののだ。田舎出の青年が、生まれてはじめてオペラを観て、大谷洌子さんの声や姿に心をときめかせたのも当然である。

もちろん、ミラー的関心もあり、先日は憧れのプリマドンナ大谷渕子さんにお会いして、心がときめくのを覚えた。と言っても、若い人ならその人は

こんな昔話をしていたら、我が国オペラ界の重鎮の栗林義信さんが大谷洌子さんとの対面を調整して下さった。長官の役得も大したもので、ありがたいことである。